

パラグアイに小学校を建て支援を続けることで、
女性や子供が尊厳を持って生きられる社会を作りたい。



笑顔の
達人

Change your Life.
Change the World.

笑顔あふれる世界を作るため
がんばっている人を紹介します!

藤掛洋子

(文化人類学者)

横浜国立大学大学院教授として、途上国の開発などに関わる研究をしながら、「ミタイ・ミタクニヤイ子ども基金」を運営。南米パラグアイに幼稚園や小学校をいくつも設立し続けている藤掛洋子さん。教育を通して、現地の女性や子供に笑顔を与える活動についてお聞きしました。

南米パラグアイで体験した
村の変容を伝えたい

私の専門は開発人類学という分野で、途上国への支援や開発、災害復興やコミュニティの再生などについて研究をしています。対象は人。特に女性と子供に深く関わっています。途上国では、女性や子供たちが暴力を受けていたり、先住民の言語しか話せない農民が差別を受けていたりすることが後を絶ちません。そういった社会的に劣位に置かれるマイノリティの人たちの権利が平等に守られ、尊厳を持って生きられる社会を作りたい、という思いで研究と実践活動が続けています。

1993年に青年海外協力隊員として、南米のパラグアイに赴任したことをきっかけに、パラグアイを中心にフィールドワークを行っていました。パラグアイは1864年から1870年に起こった三国同盟戦争(※)で多くの成人男性が亡くなりました。一人の男性が多くの女性と関係を持たないと子供が増えないという状況が続き、人口比が元に戻った後もそのような価値規範だけが残り、現在もシングルマザーがとても多い状況です。他の南米の地域と同様に、男性優位の思想も根強く残っており、今なお多くの女性たちが暴力の被害に遭ったり、希望する教育が受けられなかったりという問題を抱えています。

青年海外協力隊員時代は、女性たちへの栄養指導などをはじめとした、食生活改善プロジェクトを担当しました。当時のパラグアイの人たちは、農業政策の転換により、栽培する作物を綿花から野菜に切り替えて数年経っていました。彼ら、彼女らにはもともと野菜をたくさん食べる習慣がありませんでした。そこで、食

品加工場の設立を支援するとともに、ジャム作りをしたり、料理教室を開催したりして、野菜がおいしく栄養豊富な食材だと知ってもらうことに取り組みました。講習会を通じて女性たちがどんどん変わっていき、暴力を振るう男性に対して発言したり、話し合いを持ちたりするようになってきたのです。さらに、男性側にも変化が起こり、暴力の要因が自分たちの親から引き継いだ価値観であったことに気づき、窮状から解放された例もたくさんありました。

料理をきっかけに、カップルがコミュニケーションを深め、関係性が良くなっていくのを目の当たりにして、人間の可能性には限りがないという考えを改めて実感。日本に帰国後、この成果を広く伝えたいと考え、大学に戻り、修士論文や博士論文を書くことに取り組みます。しかし90年代当時は、このような人々の意識変容や社会の質的な変化は、大学の研究においては評価の対象にはな

※三国同盟戦争=1864~1870年にパラグアイと、アルゼンチン・ブラジル・ウルグアイの三国同盟軍との間で行われた戦争。



右／農村部で指導した現地の学生が主導する栄養教室。上／村の学校の子供たちと。下／2015年10月、パラグアイ国会下院より感謝状の盾と金メダルを授与される。左隣は、駐パラグアイ日本大使館特命全権大使の上田善久さん。左／地元の人々が作ってくれた、パラグアイの伝統工芸品であるニャンドウティのドレスを着て授与式に臨んだ。



藤掛洋子 ふじかけようこ

横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授。特定非営利法人ミタイ・ミタクニヤ子ども基金代表。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達科学専攻修了。博士(学術)。NihonGakko 大学名誉博士号(教育学)。専門は開発人類学。JICA 青年海外協力隊としてパラグアイ農牧省、JICA 専門家として厚生省、チュニジア国家人口公団、ヘルー女性人間開発省、ホンジュラス共和国などに派遣された経験を持ち、途上国での女性の地位向上や子供の就学支援に取り組んでいる。国際協力事業団国際協力総合研究所準客員研究員、東京家政学院大学・大学院助教授、准教授などを経て現職。

特定非営利活動法人ミタイ・ミタクニヤ子ども基金では、パラグアイの伝統工芸品であるニャンドウティの品々をフェアトレードで販売しています。また、学校建設のためのファンドレイジングも行っています。

<http://mitai-mitakunai.com>



た。自然を敬い、家族を大切に、他者を思いやり、寛容に全てを受け入れる。彼らは物が不足しているなかでも、分け合って喜び合う、豊かな心を持っていると思います。多くの学生が村に入ることは、村にとっては迷惑なことでもありますが、学生は慣れないスペイン語による世帯調査の練習にも応じてもらいますし、お金がないなかで学生たちにも精一杯のものをしてくれまますから、大きな負担になるのです。でも村の人たちは「日本の学生が村に来てくれて、生活を知ってくれるのがとてもうれしい」と言ってくれます。だから私たちが、ただ物を支援したり送ったりするだけではなく、例えば学生が定期的に通って、現地の人との関係性を作っていくような、新しい国際協力のスタイル

ルを作っていくきたいのです。現在、私のゼミに所属するある学生が、しばらく村に残ることを決め、壊れた道を作り直すためのサポートに取り組んでいます。高校生のときから、私のゼミを目指していた学生などもいて、このような活動に関わりたいと望む若者が増えていることに喜びと責任を感じます。2015年には、23年間の活動に対してパラグアイ国会より表彰されました。今後はもっと活動を伝えていくことに力を入れていきたいです。若い世代を育てていくことにも取り組んでいきたい。学生と一緒にパラグアイを訪れることができる今後数年の間に、活動を次世代へとバトンタッチする準備を整えていきたいと考えています。

Change your Life.
Change the World.

笑顔の達人

笑顔あふれる世界を作るためがんばっている人を紹介します!

研究を還元するため、村に小学校を設立

青年海外協力隊員としてパラグアイにいたときに、現地の仲間と協力し、さまざまな機関に働きかけ、幼稚園を設立しました。しかし村には小学校がなかったので、卒業した子供たちは隣の小学校まで通っていたのです。数キロの赤土道を裸足で歩くため、通学途中でけがをする子供もたくさんいました。日本に帰国してから、青年海外協力隊員として取り組んできた活動が目ざされ、新聞の取材やテレビ出演の機会をいただき、講演などの依頼が増え、謝礼をいただくことが多くなってきました。そのお金をなんらかの形で現地に還元しようと考え、自分で勝手に「ミタイ基金」と名付けてNGOを作ったのです。「ミタイ」はパラグアイの先住民族であるグアラニー族の言葉で「子供・男児」という意味。そのときは具体的にはなにも決まっていなかったが、いつか村に帰る機会があれば、貯めておいたお金を村のために使おうと決めていました。

資金を得て新たに小学校の建設支援をすることにしました。私の講演の謝礼のほかに、慈善コンサートの開催や賛同者からの支援などもあり、2006年から2013年頃にかけて、県内の村などに小学校3校を建設することができたのです。パラグアイの公用語は、先にも触れた先住民族の言葉であるグアラニー語とスペイン語ですが、農村ではグアラニー語を日常生活に使えない学校に通ってスペイン語を学ばないと、都市部で仕事に就くことが難しい。そこに貧困から抜け出せない構造的な問題があるので、それを解決するのが教育であり、小学校の設立や教育は、今後も欠かせない支援であると考えています。

※グアラニー語で「ミタイ」は男児、「ミタクニヤ」は女児を意味する。